

<全体分析>

試験時間 90 分

解答形式

計算, 選択, 記述, 論述

分量・難易 (前年比較)

分量 (減少・やや減少・変化なし・やや増加・増加)難易 (易化・やや易化・変化なし・やや難化・難化)

出題の特徴や昨年との変更点

一つの大問の中で三つのテーマに分けての出題があった。

大問 I で前の問の答えが後の問に関わる形の出題があった。

その他トピックス

記述形式, 選択形式の問題が増加した。

<大問分析>

番号	出題形式	出題分野・テーマ	範囲	コメント (設問内容・答案作成上のポイントなど)	難易度
I	計算 選択 記述	恒星	地学	ひとつの連星系を掘り下げていく出題形式は珍しい。計算問題は多いが, どれも頻出のテーマである。前の問の答えが後の問に関わる問もあるので, 手早くミスなく解きたい。	標準
II	選択 記述 論述 計算	地磁気 大気 太陽	地学	三つのテーマに分かれての出題は, これまでほとんど見られない。戸惑ったかもしれないが, 頻出の問題が多いので高得点を狙いたい。	易
III	記述 論述 選択 計算	固体地球	地学	問 2 は, 移動方向を推定するためにはハワイ島からの距離ではなく, 現在の緯度・経度が必要である。問 4 は, 縞模様が対称になる理由ではなく, 強弱が分布する理由を論述すること。	標準
IV	記述 選択 論述	岩石鉱物 地形 地史	地学	問 1, 問 2 は確実に得点したい。問 5 は, 問題の図の屈曲部に惑わされずに問題文を読むこと。問 8 は, あまり出題例がない論述である。解答するのに苦労したかもしれない。	標準

※難易度は5段階「易・やや易・標準・やや難・難」で、当該大学の全統模試入試ランキングを基準として判断しています。

<学習対策>

京都大学は、論述問題の比率が極めて高い。また、計算問題も多く出題される。解答用紙の解答欄の数を見て、くじけそうになるかもしれない。しかし、解答欄を埋めることを目標とするべきではなく、自分が十分と思う内容を簡潔にまとめることこそ肝要である。また、問題文をよく読み、何を答えるべきかを把握することも重要である。論述や計算の対策に十分な時間をかけるべきであり、時間配分にも注意を払うことが必要である。また、様々な出題形式の問題に備えるためにも、教科書の隅々まで目を通すこと。そして、模試受験や過去問演習を繰り返すべきである。